

脳血管性尿失禁

「子供じゃないのだから、同じことを言わなくても良いはず」と思いたい。が、本当は、どうなのだろうか？

62歳のTさん。10年ほど前から高血圧に糖尿病、その上にメタボで通院中の患者さんだ。生活指導をあまり厳しくするよう怒る。毎日の薬さえ、きちんととんでくれない。

そんな不良患者のTさん。最近、おしっこが近くなった。夜中にも、二度三度と排尿のため目を覚ます。で、「過活動膀胱」と言われ、服薬しているという。過活動膀胱では、夜間頻尿や尿意が突然起こって、間に合わないという切迫尿失禁などが起きる。原因はいろいろあるが、Tさんの場合、ひょっとして脳の病気のせいではなかなうか？

実は、Tさんの頭のMRI（磁気共鳴画像）で、「大脳白質病変」が見つかった。白質病変は、脳の細い血管の流れが慢性的に悪くなると現れる脳の病気だ。多くは症状が出ない。が、進行すると、歩行障害や認知障害がみられる。

最近、過活動膀胱も「脳血管性尿失禁」として注目されるようになった。おしっこのトラブルは、白質病変が進むにつれて起きやすくなる。しかも、歩行障害より頻度が高い。そんな過活動膀胱は、白質病変の初発症状になる場合があるというのである。

では、Tさんの過活動膀胱も、白質病変を原因とした脳血管性尿失禁を否定できないことになる。その白質病変は、高血圧や高脂血症、糖尿病、メタボリック症候群、喫煙などによる動脈硬化が原因である。だから、Tさんも少しは生活習慣を改めてくれば、この先、おしっこの症状がひどくなるかもしれないのだ。

「血圧の薬は忘れない。お酒はほどほど。煙草はやめなさい」と、また、口うるさいオカンのように、同じ事を言ってしまった。が、もう限界。

（石黒修三 しいへろクリニック・脳神経外科専門医…104北國新聞掲載）